玉梯小揮

八

源氏物語玉かつら小櫛八の巻

吉本植之

ぞふそうく　二のひく　ぐふくハ玉むづかしき所也矢を帖をあつる也おとろ
かりといふこゝ也しかどハそうくのきゝ人くちぢ媒介のおのくえ
しかどこゝ也けえしかどのあふそとハいづれも驗もなくて　いふ
こゝ也えくんなべし

ん儀き人のゐる色あぞうく　日　人を玉ぎ見る大ぬ　ゐわさ所也玉者
見所方よりん儀きこゝ也ぎ終つえ所也おかくれ所也きゝ人くちぢ中
ふる所也大ぬハ玉者見のんづきれく儀くおぢを人をふ　その人を
えふしとも玉ぢぎんのきしくよくいふこゝ　ほみるかるぞこの驗

のり城ちくもりをはてゝ　はきもの。
ちづくへもなど　四の巻　なごいの。なごいの。ぞ。ぞ。ぞくへいなどもあり。
きくぬくもる。一本かぶ。ぬぐるもの。
殿もいろ〳〵　五の巻　ぢいたの。誤。ぢ。ぢ。ぢ。上文よりぬけつぎいで。
もしぢ。ぢ。ばいろ〳〵おもをはる。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
うおつもちて　六の巻　はきぬぐ。
まんやうふを　四　ムをさぬのこゝいふよりハ。ゐいふをてのこゝゐへる
汨をこれよりハ。ゐぬ。ぬ。ぬ。

かくとおもんふ云〳〵　廿二のひ〳〵　冊子地よりいふ詞し。

三のみやまおふ云〳〵　三十はひ〳〵　係山歩成。大和おふ行〳〵云ふ云ふ〳〵二

三の句ぞ。大和〳〵むづ〳〵なる。

むつまふ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵と　廿三のひ〳〵　芳地法ふ行るるすべし。行海ふ

引也〳〵る句文ぐるすふを行〳〵ぐ。

和也ハ〳〵ぬと思ふものを　同　大和ふんをゑゐを。寄ふを久まわ〳〵くん

の間〳〵ハ思ふものを。さやうとハ云ふ〳〵〳〵ぐとふ云の詞し。

三　かぐらりハ云〳〵　廿三の初〳〵　神二句ハ。寄はいぐを句ぬべき〳〵の云ハ云

ふ〳〵〳〵。ぬ〳〵〳〵ぬ。ぬ〳〵づとハ云〳〵ぬ。三の句ハ女法更孔

〳〵ぬ句ぐ法いふ。又ぬ寄法ふ〳〵ぬ。

ゐんじ〳〵ぬ〳〵ぬ世法ふも　廿四のひ〳〵　ぬ世の二字。学ぶ〳〵かぐいぐ。大

かぐゐ〳〵ぬ詞づひ人の人ふふ云。又地よりふ云。おの〳〵ゐの人のか

どほぐふぬぐひて。ぬ法ハ大和のゐ法地よりふ法ゐ

ぬバ。ぬ〳〵ぬふぬ〳〵ぬよ法し紀を。ぬ〳〵ぬ世法ふ〳〵ハ。みぐぐ〳〵ぬ紀

和ぐの法〳〵人のや〳〵し。和法の詞づひの後。人を法ぬ考ぬべし。

ぬ〳〵ふ和ぬ寄ぬ人ぬ〳〵　同　大和の。ぬづ〳〵ぬふ〳〵ぬひゐ。ぬ

づぬ。大和ふ〳〵ひゐ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ハ。ぬ〳〵ぬ。閑月年。ぬぐ和きハ〳〵〳〵。

かぬ〳〵ぬ思ふ〳〵ぬ成〳〵　廿五のひ〳〵　玉葛ぬ。ぬぐふやひゐ〳〵ぬ。ぬ〳〵ぬ。かつぬぬぐ

ゐ〳〵ぬ。又ぬ近ぐ思ぬ。ぬ〳〵ぬ。かつぬぬぐ〳〵ぬ。ふゐゐぬべし。

ぬかぬ〳〵ぬぬ〳〵ぬ〳〵　同　結句ハ。ぬのぶやぬふ〳〵ぬ。ぬ。ぬのびゐふ。

いふぞ〳〵いつゝし。ほをとゝ
うなゞめもるゝ〳〵　日　うゝがとけるす　おきふくゝ。ゐゐゝゐゐゝ
ゝゝ何も。ゐゐゝ考ぬべし。
ゐとハ物うゐそ　此ものゝ　こゝ
細流の流れおそ。おきめ流も。花ゐ物ゐ。ゐゐとおゞ〳〵ぞ。又あひを。老
ゐゐゝ〳〵いつゝも。ゐゐをぞ。風俗。古和ふ。ゝて。旬。於比毛川久加尓
也。於比毛川久加尓（オヒモッグガニ）

梅枝巻

一ゝゝゐゞゐいゝゝゐゐ　ゐのひ　かゝゞハのを侵ゐる物ゐべし。必
のとゝゐべきゝゝゐし。侵ゐてゞ。〳〵よゐハの〳〵ゝと物ゐゞる。上ふゞとあ

ゐバゝゐハ物の物ゐべし。侵て物ゐゞゐゝよ。侵ゐいみ〳〵きゐ
ひゞゝし。ゐる侵〳〵物きゝ文やハゐべき。
ゝゝの朱雀院　七のひ〳〵　字文帝し。字文帝ハ侵方を。ゐ侵物代
ふゐゝゐ世物ひて。公忠物ゐふゝゞ〳〵ゐ物ゐし。侵物ゐゐとふ。ゐ
を兼平ハ門〳〵せ〳〵ゐゐハ。公忠物ゐ。兼平物ハ代の人ゐふのゝ
ゐゞゝて。侵ゞきの語をも忘ゐて。考へゐゐぞゐ〳〵ふや。中〳〵おいゝ
〳〵ゐ物ゐゐし。そのゆゐゐゐ。ゐ〳〵兼平。帝〳〵ゐる時ゐ。ゐゐ世ゐひ
てゝいゐゐをバゐゞ解ゐべき。ゐゐ世物ひてゝハ。字文ゐ門乃侵方
を。延ゐ兼平物ゐの代ゐ。ゐゐ世ゐひて。公忠物ゐの。ゐゐハ
らべるゐてゝゐゐ。そのゐ人此物侵の朱雀院。物ゐ。兼平門

ふ准へ給ふ。前の朱雀院とゝ申べきよう侍し。をべろ〳〵前朱
雀院とハ。字多帝。譲位ゝ申せ。兼平帝。譲位ゝ申せ。位も
あとゝ申もおきこゝなるをや。

三月 廿九日 月も花も。殿のへぶろ。とバこそ。ゝもしろ〳〵
ぞハ。ゝ。ぞ。ゝ。ゝ。ゝ

さて先にて出ぬ　十三のひ　中臣はけるの女房ぼうの。こち
きこゝやうゝんゝての男とこし。
えうきはゝべしやゝ　十四のひ　新あへはゝべよゝし。
さゝめもゝぐのも女もの　日　女もしハ漢文ハ對へゝ。高砂侍ぐ
を出ぬいふ。土佐日記のそゞ老ハ男をさそいふ日記といふ地を。女も
しもそ出ゝて。いつるんだへし。そゝて。その高砂侍を。筆はもゞがち
ふも。假字がちふ出ゆゑ。筆はもゝ。ゝゞはもゝいつり。假字をゝゞ
のゝいつるハ。高砂侍ぐハ。まゞげを假字出ぬ。むゝゝる。あし。
ぐんのかゝゝ　十七のひ　ぐんハ。綏。字し。はきふ。和名抄を引ていつりが
らゝゝはゝゝいつり。

如ゞ出て行ゝ。ふゝふゝ　十八のひ　ゝゝひ女房ぐんぐぶふゝ
はゝ出。まして。あゝ。女の出もゝち行ゝ。ゝゞ行ゝ。ゝゞふゝちねべきを。
今伊氏ゝの姫ゝの行ゝゝふゝるハ。本情しゝいひて。ゝり行ふし。
ゝりびゝり　十九のひ　はきふ。後岳はゝべしゝゝて。いつる。ゝゝゝゝ女
ゝゞ。狩ゞ。ゝて。ゝりゝゝゝりはゝる出。ゝりびゝいつるはゝべし。

蜻蛉巻

ひまけはゝり　三のひ　あゝ。ゝし。下ふんあゝゝゝきあ風ふとひり。住
も。あゝ。ゝゝての侍ハゝゝゝゝゞ。まゞゝゝつきあふおゞろうゝし。
みのりはゝ　日　ゝゝ。ゝ。ゝて。ゝて。緣はるべきゝ。會ハいゞかゝる
きゝはりし　四のひ　奥はりし。はきふゝゝ。

おくしふかき　曰　ゆくしふかきかやまどゝんとゝるなり。
ゆくびきもしかぐ　ゆやゝん　曰　かもゝ　衍なるべし。
ゆくびよゝ　八のゝ　ゆゆいゝゝんかぐ　よゆゆゝかそゝいゝきゝ　まゝどゝそゝハ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ぶまゝぐほのゝかる　ゆゆゝとの　九のゝ　まゝぐゝ　ゝの　ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑのもとに立てるうへ　日　ゑまごめ笑をかくしちほこゝかゝ父兄のまび
しゝ制しゝ給ひしゝ法をバとゞめぞして　くゞ上がいふことをのゝん
傳きやくふとゞめ給ふてそかゝるとき　さやうふ彩ふのゝとゞ代をあふせ
めひそといふし　初二日ハゑまごめ笑のごゝくちふる物をのゝし
度傳ふり　給きる上の雪のあ方ち代傳るかゝ　什奇めんはも
ものつゝこゝを

ゑかゞゞてもこゝ　十六のゝ　惜士ハ神をよゝ立るものなバ　ゝ
給ゐゝといふし　法ゝを世か　笑のゝハな
ゑをとかるひ給ゝんゝて　十七ゝ　給るハをつゝを　ゝ傳ゝ
ハ地ゝりいふ傳ゝれゞ給ゝといふべきよゝ　かるひをつゝとハ　給ゞ

ひゑふゝの給ゝかゝ給ゝ合ゝかゝるつゝをふ
まゝふ行ゝ　十八のゝ　まゝるハゝを行ゝぬ　ものかゝふ去実ふ行ゝ
ふゝつゝゝとおゞをし又法ゝまゝふハ実の永ゝ年かゝ永ゝ行ゝバし
年月のゝゞゝゝれ給ゝバゝ　日　日ゞゝ六條院ふ住て　ゝゝゝかりゝを
て　年月ゝゝかりゝる給ゝゝゝるゝバし　住ふ四ゝ上の姫ゝ代ゝ給
ゝを　年月のゝゞゝゝゝれゞゝゝいふハゝゞゝ　ゝゝハ話ゝゝゝゞ
ゝゝゝ　ゝゞ紫上ゝ四ゝゝ上ゝゝゝかりゝめゝゝをゝ　ゝ上ゝのゝし
ひゝゝ乃例をゝゝめてゝ　十九ゝ　ゝりゞ法ゝ　住ふ即給ゝゞ　太上
天皇ゝ位ゝ号をゝのゝふてゝハ此時ゝまゞハ　ゝまゞ例ゝきゝゝ　ゝ乃
例ゝいふハゝゝゝゝんゝゞゝ　ゝ　ゝハ進号ゝゝゝ　法皇ゝ廢帝の法

父舎人親王に盡敬天皇・光仁天皇の父施基皇子を田原天皇と
号奉る説〻なほ思ふ所ありてしらぬ〻ハ皆号に奉るといへども
その〻いまだ院〻中にまぢらはざるべく〻なるゆゑに今ハおほやけの院か
准へて院号に補せらるゝに皆其例を改めてといふのみ　若し
かく改〻不改〻二説を挙らるゝとふんぬぎこれも其故有り
歟に改めて院号に補せらるゝ皆其例をくハしくいふべき
又まことの太上天皇の例を改めずしてといふこゝ多くハ例のまゝ
などゝそいふなるも改めでといふもつゝしび新に皆其例をいたし
〻ゆゑ〻〻なれども此時かゝる先例ハ例を〻ハいでういふべき
例を祝生ずるもつるあをや

ゆゑ新皇とそハゝ　十二の巻〻　いとかなる心を皆ハ皆を
かゝるべきなり

上巻菜花

ちるべきかとつゝ　十六の巻〻　そまふかまふべきかるつゝ
とをるなり　十二の巻〻　上ふ年ゆくまゝふとつるハ十二月ふ形まること
ちるべく〻下ふ年ゆくつる所まゝ〻〻巻ちり正月へうつ
まるゝ　種ハ〻ハ十二月ちるべちなるべ
巻〻かりけりさかりけりあるべふ〻　六の巻〻　巻今もちなふ海
代の事ハ姫ふ〻ふ〻むこをえらびてとり給ふとゝ
ゆ〻あるをまして勝ゝ　ゝ　ゝ伝をまり給ふいまハ〻巻をとる

永きはなるべ。むろをもらんふさもあぐ〜ぬべ
きふるもつ〜みぐ〜のくきふし。さるハ年ゝはなるまじ。ちまち
なせてハ人なハ嫌し。給ハぬをよ〜うしたるをバ。なろきるとを
永ふつきて。かくハのあつらし。ほ〜〜ぬがへるこし。
かゝ流来ゝ。ゝもろ〜ふさん　四五のひ〜　もろ〜ハおぞろてやうゝ。
子孫のあひしるをなれば。おのゝ年ゝ老ゆるかぎの。おぞろるし。
いゞ〜ふつきてを　四六のひ〜　ちゝハ父なて。ぶ萄ふも後の毋し。又紫の上
とはをぞ。ゝまバ。何方ふつきてもあ〜記し。倩ふ桂樹ふの見ぬ
まぐ〜といふ。いふぞや。桂樹ふハ〜ふよ〜ゝ。ゝきをや。
見給ひ〜べよかし　四八のひ〜　〜〜ぬとハ時〜なて。ゝのまび〜老のま

よゝ。ゝ。ゝ。

えとゝいふより。こゝまでハ紫上のんを。ゑがいてる文。うしろ姿ゝゝしい
ふよりハ。冊子地よりいふ俗うれバ。ゝゝ。その堺ふ。ゝゝでハ。その位。
おいてうふおりゝゝて　平八のひゝ　帝本光かりいてるぶゝゝ。俗ふぶんぎや
うふいつゝを。おかやゝ。ゝること。おゝゝれゝゝきこと。これゝゝけこゝ。ゝゝ
つふ合をてんゝべゝ。をてこゝふいてるハがゝゝゝきこゝけおんをて。
ゝゝゝゝねこゝし。俗言のあかやゝ。ゝるもをこふつゝをこゝけりはゞ
んぞゝゝし　河海ゝむがこゝし。指きふ老らうこゝいてるハこゝけ本けこし。
こゝと又おゝゝれゝきこゝいふゝゝ。おのつゝゝこゝかゝてり。
ゝ身ゝけゝをぎむゝゝ　ゝ子云のゝゝ　上句ハけんゝぞゝ。ふきふゝを。ゝれをぎむこゝの
ゝゝふを。まこゝをゝてゝゝぞふゝいふこゝし。下句ハけんゝぞゝけまこゝふ

源氏物語ハ。ゝゝけ。ゝゝの浦ふこゝひゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

きゐるよとし。

ほどかぐ〜ゆえ〜　六十一のえ〜　あるはまばゝよこ切てかゝしきあられ
どとうぬさゝふ〜つぎてよをべし。さてまうぬさゝふのあふ品ひとつふ
仙乃為るあや。本のまゝ安そハ然しさゝれぐいつゝ張るべ。
きんをいぐゆんゐど　六十二のひ〜　ぐんをあ下　六十九のひ〜　かゞ〜ゆきあやのうをぐ
んふ〜くるぐゆん〜ほどかるべく。せんをいも。泉水の張ふをつく
ど。口書ゆ張り。糸ゐ壇をどいひ〜ろべきふゐ〜ぐ。せんをい
を。ゆど結冥〜張りやゐ〜む。
よりひのゐどをとかぐ〜〜　六十五のひ〜　今又〜二人のれゐぐとゆ芸のど
ら〜三ゐ〜びて舞張ゆをうて。源氏ゑ〜を改たるのよりひのゐ

どとかぐ〜ら〜し。
毎ごろをひゆひふる　六十九ゆひ〜　行すも。年を安をバ功芸ゆつもりそ
ひ〜。まるる拍ゐれだ。げ古代の和琴も。をぞ行〜ん〜ゐどをく〜さ
やうふ安ゆ〜張る安〜〜いふし。
いとさるとる張りや　七十二のえ〜　さるとハ。ゆど結冥〜張りをべ。とし
をさう〜をぐゆど安。
ら〜〜ゑ人をでえをりる〜　七十七のひ〜　ぞハてふをを。えハ得ゐり。
湖月ふ。えをゑ〜をて。源〜いるハゑがてし。一本ふえ〜ゐ。
りひえむををゐぜをて〜ゆ結ゑ〜　八十一のひ〜　をてハ。をその張るべ。
をて〜ゑでハ。清品の張より。地の仙ゐ〜る堺ゐて〜をのぐ。

おぢろをおもてでハ　八十三のひら　細流のごとく　茅茨、高野ごかもげんもぐ
ひのこと例を拾遺ゆゝふるつ。
ゆくすきかひごとおもど　八十四ものゝ　仏為高野奈良を法ハ代ハ
つそのうおもバゆゝしきかひごとハのくまふし。
よとまゐれ人の　九十二のもの　りしよりるべく　えさゝぬ人まハりゝぬ他人を
いつもよとといふハ　ゐるかくゝ波いつも　つのふりゝきこを
いふとハおもし。　ほふ地をる他人とりハいりぐ地をハてふりぢぐ。
さゝそうべふもそんぐを業おもゝ
ぐゝ法そのもぐ。　日　とまぐ法てよむべゝ法てハそこさ
むらわく　九十三のひら　行方ふもつをそ手ふ一人ゝいふこと。

そこふこそもこゝ　九十四のもの　もこゝといふこ　昭こ上ふゝこぶむう
ひそのはつ日ハふぐ　ゆ写ゝ偽ゆをりりぐる。
えおの光おゝぐめうハ　牛ゐれもの　をべて和の光ハ偽ふゝ四いがいるこいふ
こ平こ　こゝハ女三宮の仏方へこ　こゝの和ふこ　四いぐ和るゐぐふを
あゝバこをもべき波　四いぐふぐふえりゝぐ中絶ゝこゝいふを
法いゝ紀もぐこゝ　上ふこゝぐべの法りゝぐきのゝ　光ぐゝゝてこいひ法
かゝぐけるきこぐゝいひ　ふぐゝゝといる和ぐふかありぐ。
四くゝちれ筆ふこゝ　日　耶輸多羅が　ゝ　仏ふ　河海ふ　或　勘文そて　出
こを　ゝりこゝふよゝかあり　日ふべゝ。
又こゝふこゝちゆきぐふこぐこゝりこゝ　九十六はもの　心のうちゆこ人こを

ぬるひのうるへ人もさる花やうなる所りまで見ばうすゆ宣てハまて
ふんゆきて おもしろしと思ふ物〳〵と思しきく人
人〳〵ゆ〳〵やふて て ふるまで みるうれやふるゆゑ ぶとハかり
のへ〳〵ゆ花やうなる所うをて いつり ふ〳〵もハふ〳〵を信まる ちご
らうハ 年等ふて て ふるまぬし
ぬちぬし 九十八のひ〳〵 めのとごゝハ 乳母ゆ ちゆ〳〵ハ中
ふ ゆの乳のゆ〳〵 ゆるゆ
ゆ〳〵 うるかゝ 見ゆ 九十九のひ〳〵 鞠の懸 そて ゆふ ゆ ゆ ゆ
へ 遣るハ 後のうゆ ゆ ゆ 此 物 後の 後 ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ
〳〵 鞠 蹴 ふ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ

ゆ ゆ ゆ 鞠 ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ
ゆ ゆ ゆ

いでや船ぞ　二のひら　船ぞ　ゆて　法を切てんはべし　船ぞかくとつぐくふハ船ぞ
まへちりへ乃ちろ　日　ゆ　ふ　ふくきこと
いとろきこと　三のひら　ゆ　ぞ　一本　ゆ　ぞ　ゆの下ふたのなりまで　それ
も　ゆ　ぞ　いとろ　しきを　写　保まるかや
稲うくく　六のひら　指さはぐ
うそもちくむる船　日　こまる指さのおくく　一本ふちくむるかるる
あまじ　船ろし　船ひを　ちくむるてハ　ふ　ふまるとふもうるぞ
ちくふ船ろ　船を　十はひら　はとふとも　為しる船べし
ろ船るきぢ先ヨかまで　十七のひら　指さまろし　うぐはむハ作れし
ふちくはちふ　八のひら　乃ゆちくん　船ひまるハ　ふ　ふはちく

よせるハ裏ゆ　表ハくぐ　位のはの乃海人ちまバし
かぐくおもて　十九のひら　ゆ　ぬ　或人のいくく　かぐくをのこを　保
保まるなるべし
うへのきぬのいろく　二十のひら　源氏ふをちぐ先て　紫上女院夜夕
ちふ　ふ上船の料の懸盤を　口位五位六位のそりつぐきてなこと
ぶをいふなるべし　ゆ　尼ふの料をいろふて　ちるべし　ちて　うへのき
ぬの色をもていろハそりえこぶ　ふ　ふ　ふ

説のおもしろかるべし。ふじ佐の佐云佐とそいふべき歟。うへの衣の色色はよろしからず。又源氏の方くはけおよろへの袖をいとまでしてて。尼君のつまをいとんこころもいろ〳〵ぞや。

まゆびのおもてありてハ　日　ありてハおしての俗なるべし。俗ふいふ張り付添こと。河海の説乃ごし。　細流の説ハ甚しなこと。

うちはみゐぎさへ　廿三のひ　廿上ふ。えハかゝ　はどいふ云なりてハ。

あゝこゝいなやこゝ。

さいへどなしびき　廿九のひ　廿えの方ハ袖添りしどよろづの事つひ。

ろづ　ものきよりつふいるふかりてさハいへどもこ。佐説こ。

まゝはあゝの孫えこ　廿のも　まハわゝとこ〳〵説なると説まるゝ。

かきこ〳〵る孫の　廿二のも　今ものはるかべし。そ。爪のこ〳〵ふてなぬ

孫てゐるこのさびしきこべし。

えの佐方説のぞき孫へまバ　廿三のひ　源氏ふはけぞき孫ふこ。夕雪と

いふをこむがこ。廿四のさ夜。夕雪ふハ簾のかふかりふまゝひ

ふをり野まバうまるる所のやふ。肉をのぞきえふべきよ〳〵ぬ。

孫きふ夕雪こて。こ俗ゐ。いるこ。ぬこ。こゝふ

やわ〳〵ゐをもて源氏ふかりぞるこ。野〳〵こ。こへまこ。

まゝの何源氏こて行ゐ。ゐのこ孫まバ。ぬこめよりゐ方

こ孫衣孫をよ〳〵えおき孫ふべきふわ〳〵ざれバ。光新のぞきえ

てハ必ずそまく〳〵ふやわんとゑべきこと。又いこよく。ものき

先のかりゝふまで。さゝふ時ゝ。そなりおゝをれうを
ゐるおゞ。ゝいふまでハ。源氏家のえすふゝ。物をもて。ゝつゝふて。こ
きもかまを。えゝゝいふとゝろぞ。夕雾えのうすをゑる。大ゐもと
ゐふ。ゝゝゝゞ。ゆゑゐて。もるべゝ。上文の源氏えゐうふたゝべて。大ゐ
をし。をべゝ。まひをえるゝいふを。を形をゝゞふをえざれゞを
も。ゐるゞへゞて。その。ゐゝゝりゐをえるをゝをいつり。さゝバ。ゐゆう
くゝハいつり。簾のかふを立て。ゐをバえざるなえ。又。ゑのうへの。えゝ
をりゝりもえゝ。ゝいつゝゐも。夕雾えハ。此時を。えざるゝ時ゝを
ゝ。ゝ。かのうゐも。此時ふゝゝゝん。ゐを。がくハ。ゐゐべゝやを。
をゝこのゐりをて。ゐん　此ゝのひゝ　をて。ゐん。ゝいふゝ。穏をゝゞ。ゝハ

をゝゝんを。冥ゝ。ゐやゝ。ゐるゐ。一ゐ。をゝ。をゝん。ゐ。ゝ。
えゝゝきゞゞみふえゝゝゞゝゝ。　此七のえゝ　ゝ。ゝのゝゝふ。撰ゞゝ。ゝ。
みるえゝゝゝ。　此八のえゝ　いゞをゝ。ゝ。耳おゞろゐゐをゝをゝ。えと
ゝゝハみゝおゞろゝへゝゝをゐ。傍。ゐをゝ。
かゝをゐふゝをて。　日　かゝハ。撥るべゝ。えゝゝ。
ゝゝらへるゞゝゝる。　日　ゐゞんふゐふゝふいゝゝゐふゐ。ゐ。ゐ。ゐふ
ゝゝ。ゐるべゝ。傍ふゞゐふゐるゐゐ。ゐるゝいふゝ。
ゝゞゞのゐのゐゐゝゝふゝゝゞひて。　此九のえゝ　仕傍ん。ゐゞゝ。ゐゝ
ふゐゐゝゞ。ゐゝゐ。ゝゝ。味ふ。ゐゝゝ。ゐ。楽器の中
ふ。ゐて。琴ハ。ゐふゝいふゝ。ゐるべゝ。ゝちハ中ゝ。ゐゞゝ。ゐゝゞゝ

はくくとをへだし。

五六乃そ〳〵　四十二のそ〳〵　ちう〳〵をちう。さどう形〳〵びて。ちうもそ。

を問るハ心がてとし。さて此る。近き学ふ。こまうれ。従ども。

〳〵しう形〳〵ざるとて形もバ。〳〵ふをいづさど。

かやう形るちく代いひわつをてる　五十一のそ〳〵　うやう形るゆそ〳〵。これ

ち。ひがやう形るとをし。ひ。ちが形しるなるべし。

いときよう〳〵ふちんおそ〳〵ナれ　五十六のそ〳〵　こまハいくきよう〳〵ふおり

まして。形ごをべき西し。本のまゝゆそハいづ文よくそちん人ち。

和きまふ。

なふちふなりつ〳〵むく　五十三のそ〳〵　いう形るこふて。まりつ〳〵んとうふし。

形ふ〳〵ふち。伝のと先ふくいふをし。但毒従ちとふ〳〵ひ。

う〳〵んよハあひうんおゞ〳〵結る　日　世下ふそ〳〵いふ伊ちそハ文と

このひゞ〳〵。

五おきそゆく〳〵ち　六十五のそ〳〵　括半かむりふべし。

五永月そち〳〵　七十四そ〳〵　それなゞ〳〵ハ原氏ちハそのうをけまくの

月形ゞ〳〵し結るハそ〳〵おゞ毛〳〵結ふちハ稽そのうをけまくのそし。

〳〵いつるし。さて永月そハ学ふわ〳〵ぬさあふ形り〳〵を。ちハそのう

こけまく形るは月ちまバよ〳〵ちり結ふべきふいう形まバそ〳〵あゞ

まをバ〳〵ふゞそ〳〵。ひがやそ〳〵ちるをし。

をほ〳〵ゞ結くのちるをもそし　七十一のそ〳〵　こまて〳〵ハ〳〵ゞその病者

の祈ふのこゝろざしなる所ふ。死霊の追福ふハ形〳〵ぬし。
おのゝ法おがえ　七十二のゑ〳〵　もゝ朱雀院のみなかどの。いゝ〳〵かゝづき
なり給ひしほどのおぼしも。　侍臣ゝぶつり。
ら〳〵ろ〳〵　七十四のひ〳〵　やしぐ〳〵。
うつ〳〵人ゝそぐふゝ〳〵　月　こゝハ葵上ゝ法の御ゝふなり給ひしゝ
をの〳〵ふし。　住ゝ所ゝ。　乳のうりぐ〳〵かゝ〳〵ゝすぐうをいり
でゝハむ〳〵つきゝうゝ〳〵とゝでハおぼゝえん。
ゝひぐまれるべゝれど　七十六のひ〳〵　けゝ下ふ。どゝもぐゝをべ〳〵。
さばゝうゝ人ゝうゝ〳〵　八十ゝのゑ〳〵　指ゝ出ぐゝこゝし。
内ゝうゝつゝび〳〵ゝ〳〵　八十六のひ〳〵　女三ゝ宮ゝれゝこゝちゝけゝ所ゝぐ〳〵ひゝのゝけゝ住ゝうり。

乗元の法いゝで。
ぶゝうゝぐゝらふゝふゝふ人のゝこゝゝゝふゝそゝう〳〵　八十七けゝゑ〳〵　けゝ所の法ゝんけゝおゝきゝを。
稲掛、大ゝ臣ゝがゝいゝそ〳〵ゝまゝびゝぐゝふゝとゝハ。上文紫上の御ゝをゝうゝきゝるゝし。ぐゝうゝぐゝち
ふゝふゝふ人ゝとゝハ。紫上ふゝあゝて〳〵のゝ女ゝゝ宮ゝ。あゝるゝあゝて。紫上の女三ゝ宮ゝ。あゝるゝぐゝちふ
大ゝ切ふゝふゝひゝうゝふゝよゝ〳〵し。ゝそゝて。ゝそゝの紫上のゝ母ゝ宮ゝあゝて。女三ゝ宮ゝをゝ。ゝぶゝ〳〵ハ
〳〵ゝんゝよゝゝそゝがゝなゝゝもゝどゝゝもゝし。ゝよゝうゝびゝふゝとゝぐゝう。ふゝきゝ〳〵ハ。女三ゝ宮ゝを大
切ふゝふゝひゝうゝ。ゝふゝうゝぐゝうゝふゝ。ゝさゝゝぐゝ〳〵ふゝひゝやゝゝ。ふゝきゝゝゝうゝれゝとゝいゝふゝうゝ。
あゝやゝよゝそゝ人ゝのゝう〳〵ゝとゝハ。女三ゝ宮ゝふゝつゝきゝる。ゝ房ゝ。ぐゝけゝふゝりゝんゝ。ゝそゝうゝをゝさ
へゝゝやゝわゝんゝかゝゝやゝうゝんゝ〳〵。ふゝひゝゝゝぐゝしゝあゝゝそゝし。ゝよゝうゝびゝふゝとゝぐゝう。ふゝ
きゝ〳〵ゝ。即。ゝぶゝすゝし。ゝそゝて。紫上の志ゝをゝかゝぐゝう。ふゝきゝふ。ゝ所ゝんゝぐゝ〳〵ハ。法

しといとうるはしく、えだ〳〵さま〳〵をとりのゝかもし、さてそべてのそうぜつで
をもていたゞき、女三ゑをとりあげうふたゝかに思ひなしかふ思のしかもさ、女三
ゑハ、ゑづら〳〵にたよりをがおきどゝもさゝとおぢをで、さびうりよりぐうり
つとりかまりて、おのよりそのゆ房ぼうぐの思ひんそうまで、やう〳〵や
〳〵思ひやるもなりかをとどりの添きうりねしのかもし、さてかく
実ハ紫上〳〵女三ゑしの思ひうりおきどゝもしそべて法のうへをゝうぐ公
界ゆてのかゝるかをてゆよそ人〳〵いひ、又思ひかぐ〳〵さま〳〵をとい
かも、ほく〳〵思ふ人のしかふをゝうまで思ひ見ぐ〳〵さま〳〵地ゐるをゝ、
公界ゆてのかゝるゆし、〳〵いつ　ほゝをうゝびゑぐゝし
こゝハ〳〵ぐゆ日ゆ　日　女三ゑへ紫上のゑぐ〳〵の添きふ封へう〳〵源氏

ゑもゆ、みづ〳〵めんぐ〳〵ハ、濃きようし、紫上ハうゆ女房ぼうぐの思ひんそうろ
まぐ〳〵思ひやるゆ、ゆ、ゆ、

なむ。さて年ごろの願ひもバのこと。ほいなくなげかしく。
えづうしなきまてうり　月　右乃方より上なりすし。されバそもをうま
てぶんづきねーやとのうまふし。まゝふけ方より上なりぐ〳〵。人か
おくりて。えあるもせぬ。あれ身いんづきねーとし。
ものをんぐそ。まあて　九月の九日のうち　をもぐ。おぐやうなりぐ。
九月ハ院の大后のうち　月　けん大后より方を給ふるすハいんりもうとと
あるとなし。さほふうらをめひしーようハ上方業まとふ給て五百。
いうりもうねくうぐ人のうち　九月ものひ　しぐハ河ふて。人ハうちへの
人なし。ほふしぐうぐしして。これを柏木といふハうちにえぐこともさ
ていうりもうねくハ。ものしうをへうつて。人のいうりもうねくて原

氏ふけあーきやうふのこゝやしねをかふのこより給ふこし。
きいうしぐるやこあうて　月　柏木ふのうし。ほふ。紫上女三の
ぐのうもこいつハこぐり。ものぐバうう給ひてこうつるべき
を。又院うちこいつる。うをもこうて。ハうねをぐ。
ものをも〳〵　五の月　女三宮より柏木ふもこいふを給るべし。物〳〵
でハけ羽ものぐ〳〵。ほハみぐうし。

柏木巻

柏ふ〳〵ひ〳〵給ふおぐのうち　きのひ　ほふハ。花やう給ふうりつて。
柏ふ〳〵ひるぐふおぐ給ふ。柏木ふの方〳〵ぐうひのふをわ〳〵
てかうふのうをこうる給ふ柏木。ものうをのうを。

のこぎちふうこうひあふがけりとしくいふし。ほうろう。又搭きの説
きおくりのとりるのもじかあつぞけのへうふくいふやうはとおり。
もしかの説のごとくハおくりかてとうおくり物とバとてをべ説。
あへちん　四二のひら　搭きふいつるごとく。搭ちんのうふて。俗云ふかんかん
の物をいふ。うつさるわり。
ぬしろいちんかき　月　搭きふ。ふろうをてべているごし。といつるごと。
おがろまはこおろで　四七のひら　搭き説。中ふ長。上ふもいつり。
俗説ひりきふこそハく　月　とハ次の語をべそ。ほつとおろとふとうまり。
人情しと思ひ申ひ　四八のひら　どの下に。おん。ゆへぞとをべ。ど
こまてはは何をくハ搭ひりきとをべきてふをそし。

いまくききちぎおりきれで　月　此時ハ伯母ハ喪の中物とバ。ゆうれ
きちぎ。忌べきをわふわくばふかくいつるハ。ことハ諒寄はうおるあ
り。おやゆまのいくはをるばかりてし。
ちじはは鈴ふ　四九のひら　湖月おかふちぐとおるハ説し。父ハ行しど。
おやのきくよわるるふ　月　きくハ考し。をべて親の喪を。考くいふし。
もろこしもてもはいつり。ふハまきわてのきし。ほふいつ論ハてか
ら勇おきこしこそハこぐ。ちぢの。ねしこふやつまはるこ母のいこ
しきはいつるのこ。ゆへ。ゆゆかこハなく。ふのけを得りて。まこふのき
ふいつるもむごくし。又搭きふ。きくを四といつるもむがてし。
ふわくおくばこ　四十二のひら　ふくおくばのすハ別ふいつり。ふはきハ伯母ハ

の中を言ふ事つゝまバゆゝしきまでなげいて、義家を恨みくハ
はせの相手うつでの松うハせるでふ、義家たゞしきをいとゝ
流いみしくもゆゝしう、猛きさもゆゝしうなる事。
かゝる中に云ふ　日　此名所乃奇し。
ちかうなりぬ　四月十四のひ　近うハ桜本元のもと、遠うハ保元つけるもの物語。
此つのもハ近き所にてつふ、遠うしいふそしゆちまちしゆがつるやうに
もゝぶ、紅しゞ、近き所ちうちふてる。柏本元ち近きふくらぶもバそれ
きむ〜物もバなり
よゝゆゝえの光
此文　ちゝ物ちうち云ふ　三のひ　猛きふ、ちゝ物ちうち云ふハ笛尹の孫といふを。

いゝで笛をいゝでよ〜のゝいつてハゝでう孫ちうん。和ハ理者ふよせて
つ〜いつそ、ふるゝし。入なんそハ佛のそけをあひし。義花ゝゝ
いろこのゝかゝ　六のひ　おゝ〜ちう絵ちう〜。ゆゝ流ちう〜。
ちうおふ出てう〜　十四ひ　結句のをゝぶ、ぶ、ちうでハちうのつゝ。
ちうぬり紀ちうち云ふ　日　四の日、琴ゝ絵をへちうハ編ちうゝ、ちうハ裏ちうゝ絵。
裏ハおゝ〜ハいゝ物ちうちふ、ぶ、ふ、ふ、ちうハ〜れを琴ゝを表ふ出して
いゝちうゝや物ちう〜ちうふ。
こゝ笛ハまでゆく物ちう　十二のひ　此笛を吹んゝハまでゆゝ〜し。此笛
をつゝへんゝハいゝでゝ〜し。ゝちうゝ住ゝしゆゝ。
ちう笛ふ物ふちう〜　十四のひ　三の日、上ふちう〜ちうゝたゝちうバ物ゝしの物ちう

うゝの細ゝ川ゞ河し。ちまゞ。ほゞてもしべゝ。
大ゐてそ　十六のひゝ　てそハ。さゝの名ふ。左近の名てそなゞ。ほし。てそし。
ゑゝちの名つゝふハゑゝ　十七のひゝ　美ゑ名。原氏名の。ほゞれゐ形ほバ。ゑゝ
ちゝハ。一きゞゝおゝもべきゝ。ハゐゞせゞも。女ゑゑハ。柏木名のゐ
ゝおゞも名ふ。おゝゝゐふゝやゐゞゑん。し。

終出堂

みちゞゝ。ほゝ。ほゝ。ゑて　二のひゝ　かゝゝとハ。寒ゞ和せゝゝとハゑ
えぬやゝふ。ほゝ。くゝゝゝる。し。寒をのゞゝし。ゝふ名ハゝゞ。
名やのゝゝひゐて　五のひゝ　こゑ名ハ名賜のゑべてをいゝる。し。侍名ゝ。
袈裟ゝいゝゝハゝゞ。てそハゑてゝふ名ふゐをゞ。

まゞ新ゝゝる　八のひ　月ハ名ゐゞ。まゞ若をてゞる名ふ。新のさく
ゞるゐゞし。下ゐ月ゝ。ゑてゝいゝるハゝゞふ新のゝゝをゝる。し。
ゐ大ゝゝ。ゐゝ　九のひ　結きのゞゝ。ゐゝ下旬の光ハいゞ。
ゐゝゝ名てゝ。ゝ　日　結きゐゞ。ゞゝ。
なゝかゝいゝ名結て　日　ゑゑ。結てゞゞ名。し。
ゐ月ゝゞ。ハゝ　十一のひ　四の日ハ。誰ふゐ名。月をゐゝ人の新ゐゞかゝ
ゝて。ゑゝ。大ゝゝゐゝくゝし。ゞゝいゝゑゝ。ゐ形ゝ月ふ封へゝ。ゐゝ人のこ
形ゝゐゝ。ふゝし。院のみゞのれゐふ祖ゝゐゝ名ゝ。ゐゝ。ゝをて。
まゝふ結おゞ。ゑゝ。べきゝ。ゝし。ゝ形ゝ月ふゝゝわハれれゞと。ゐゝ人
のおのゞやどゞゝふゝゝて。秋のゑひゝゝゝわ結ゝゞ。ゝた結ふし。

下句を、源氏にあれば、みづうみはるかにしるべしとは、みづうみはるかに
ゆくえ〳〵ふよりおく、又次句の例もあれども。

夕雪を

ひかりくもれるせうそこそう　五のひら　掛詞のたぐひ。
おもてに　六のひら　癩（オロカ）みてしといふをもし、おもてくしなどもいふなり。
ふるさとの　九の句　掛詞考ぬべし。さうといふは、山栗栖野などふ。

夕雪を領のひる沈りもし、今雪ふるなどは行とおく、葉にといふとは異なり。

六　森のこやうに　十三のひら　山のこは、森がりといふことなれば、森
をもしもし、柏木ふきとるうへふ又夕雪ふるを、そこそこふやをの
をうつうつにべきをそはまるまじきといつるし。

先さまし〳〵れんの折りかゝりさまよ　十四のひら　義紫式の、柏木ふ
へるんを、森がりに先さまし〳〵れんとおぼせるし、そこんのく侍を切て、
まきんふて、かく折りかゝりとぐさまよといふし。

ちゝぬこ〳〵　十五のひら　下のどもぶハちゝてきべし。

日がれみづうを　日　今より後もゝおしうちうるまぐ風きがるれ
ぬぐ〳〵。森がもんおうりやせんとおがをしたといつるハ、冊子地ようりいへ
歌河まて、森がりんおうりやきんとはミづうもおがてといつるし。

てはみづうをいつふ。森ぬぐ〳〵ちとハきし。

人〳〵ま〳〵ふう　十七のひら　掛詞得まり、浪ふとおがをとけるまでづ
きうる法なるをや。

人をいざなひて　十九段の詞　結きこえ、致さし、出たるよわ〳〵しび、
そよや　同　俗ふ、そもよ〳〵いふがぢ〳〵、ゆゑ〳〵ふり出て、ひいつぐを略す。
今もそもよといふし。
まいていふひさ〳〵こそ　廿三の詞　義とてわ、まる説よろし。　舞
花も結きもろつし。
あづ〳〵よろれんもそひて　廿六の詞　結きえ、ごとし。
きさやうあるきに紀ゆるけて　廿六の詞　結きゆ、ぢ。
ぬさあ〳〵ぶこちよ、ぢわ　同　結きい、〳〵きえ、ごとし。
こうひも つきおきをこそ　同　結きえ、いこ〳〵きえ、ごとし。
おきあ、ぢ、ぶ、ぢ〳〵こそ　廿九の詞　ゆるき抱ゆ〳〵ゆるゆ、ゆるべし。

さそ、ぶ仕ゆ〳〵の　同　のもど、ハ、ぢ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ

よべの雨ふりつゞきて風さへ吹きまさりぬれば、うちに籠りぬ。
きゝふるしこそ、風ふきまゝにみふるやうにいつもの住ひのうちにて、
ひがしはやまちかくぬる　廿六のひる　ひがしは高所のひがしにあるゆゑにいつも
いとゞ。
ひいきにいみじくいへど　廿六のひる　ひいきにはひのべきにあるべし。
いふしてかくゆるふ　廿九日ひる　ひはをゆるべし。いふしてかくゆるふ
てかくゆるふるかたもあるべし。なほしかしもあるべ
ゞつゞきはゆるれば。ひはいふべきにあらねばゞ。
いとけんのゆるかたゝじ　廿十のひる　いとはいとゞあるべし。
月ごろへまれなど　日　月宮八日を得るゆゑ。日ごろへるとばあるべし。八
月よりみ月ふる間を月ごろへてとはいふべきにあらねばゞ。
ゆいづもとうゝ　廿十三のゆ　きえうるはきあるゝ所にたゝよくいふゝし。
うきうるもふるなどいふとゞひみる日ゞ。
きものこゝろわゞるもゝど　廿十四のゆ　ものこゝろとゝかてよむべし。久方の
のゆきふるものこの歩るゝ乃ぬ所へゆゞもなりもゝど。
いつひきにきれうちかわ　廿七ひる　ちはゝを得るあるべし。
かゝ所にはもかもの　日　毎に高所乃に別もし。松本ふるもゝ所ふるゝ乃ハ
ゆ星ゆゆゝ　日　指出考ふべし。
をゞゝはゝ　廿八のゆ　指出引ゆゆうむふをし。
ゆ　廿九ゆ　青松しの所此ゆゆて小出ふふる所

のみぢかくるでうりみて。者ばしゝといふふ。こゝハなゝ。こゝぬるが屋
やけ小屋こゝりをとゝいふ屋ゐるんといつも。
さうそて又ゝ　六十四のひら　ゝもとゝり。茶屋院のおぢゝ老をれんし。
ぶこのゝふゝわて　六十五のひら　このゝとゝいふこゝ。ふて。もゝ。ぢ張り
ぞうるべき。
まゝ。ぢゝぬるぶゝ　六十六のひら　ぶゝとハまゝゝらゝ。夕者ゐ乃
のゝまつる組を。同んして。さてそのまゝ。ぢゝぬとのゝゐふゝ。ゝづゐぬ
ほんがまんの。ゐふゝを。ゐまて。どゝあゝるし。そゝりぬほんぶまんとハ。ゝゝび
夕者ゐの。ゝひゐ。ゐへゝゐつる志ゐ。ぶの。茶ハぢ。ゐまゝ。ぢ。ゐを。ゐるといふ。
さて。ゐふゝそゝいゝ。ゝるゝ。どゝ。もゝ。ハ後の人の。さうゝらふゝそゝへゝるゐや。

ゝハ決て。ゝゐゝ。ゝゐべき。ゐゝりハ。ゝるゝ。ゝび。のゝゝ。べきし。
ゝとゝゝりハ。ぶゝ。ゝ　同　ゝけ。ぶゝ。ゝ。夕者ゐの。人ゐ。ゝとゝゝ。ゝんとゐゐ
ゝるを。同ん。ゝゝる。ゐて。さて。ゝゝ。ゐふゝ。ゐゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

ゆうをいふ。そは上ゐかけ。なほ何のゝ。ゆゑ。なでくへく。ゆゑ。
のゝづゝけるゆゑなるし。一そのゝ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
いとしく。危ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
うゝ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。
ゆゑ

かゝれたるのゝ名なれば、おくゝゝにも、俗のあづまぶくのもじゝ
となるべし。指きふりゝ[illegible]ぞゝ、こゝふりかゝるハこゝぞ。
[illegible]　七十五のひら　二三の白ハ柏木ハ、せゝもぞ、ゑとバ、ゆんの
ゝちふるぞめかきて、こゝそれざるゝし。
[illegible]　七十七のひら　ゝぞかゝれば、ゝで一つの名なれば、いふ組の名ゝ
[illegible]ゆゑゝ　七十七のひら　ゝぞかゝれば、ゝで一つの名なれば、いふ組の名ゝ
てし、ゝて四の白ハ、ゝゝゝゝとき、ゝとゝゝをゝ、結るハ、ゝゝとゝ[illegible]
をゝけゝゝ。

[illegible]法花

ぶつゝをゝゝゝゝゝ　四の白　一本ふ、ちのゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ、ゝゝ法華経ふゝゝ　ゝゝて、ゝゝゝかるべし。ゝゝのゝゝのゝゝゝし

ゝきゝてきゝこゝ。
[illegible]ゝゝゝゝゝゝゝゝのおのがゝゝゝゝ　三のひら　ゝゝのゝのゝ、衍なるべし。
[illegible]ゝゝぬべきゝ　七のひら　ゝゝぢめゝゝゝゝゝゝゝ、三の白ハ、ゝゝゝゝゝゝゝゝ合ゝ
がゝゝ、ちぎゝゝゝゝゝゝゝゝ

で給ふを、母ぎ殿の西なる方に、紫上の寝殿ふるまち笑めふと、それ
ぞかしこくかくなるを、寝殿〜東対〜と、又未だ文より、ほゞ北方と
いひ、あるさまいつるを、みな二條院の西なるまに、東対をいつるし、
六條院ならばこそ、さて又北面を紫上の御〜いつる流ハ、あるさふ院
らせ給へんを、〜いつふ和をぞ、もし紫上の御方ならば、こゝ〜ふとそ
をべ〜を、又始きふをいつるこゝ〜、なわふて給ふべそ〜〜いつを、
紫上の御方ならば、なわふて給ふべと、笑へど〜ならでハ、御とがり、
住ぎを、これ〜をバいふんゝ給へ〜と、ふかい〜おろそか物ることし、
月ゆふの野〜ふおぼし〜ハ、こゝろひそか〜 十七のひ〜 おぼし〜をまでそ、
源氏君のんを、〜ぶいつる文、こゝろひそか〜ハ、冊子地ちゆいつる文なるう、

その場なきハいぶ、おぼし〜をの下、行と色、つぎの後〜〜ざるこて
ちを、これ〜ハ後ふ後ふる地ちるに、紫式部のそわをづ〜しる後なるべし、
おく後ふそもいくよりハ、ふべきなり 四 こゝを又、源氏君ゆめんを、〜ぶいふ後
ちわ、冊子地ちわいふ後へ、〜ぶふ後ぎて、堺ち、大〜〜巻後、〜ら八
を、〜いこと〜を、〜を、大きなる文ちれど、その名ふを、まれ、〜ちわ、
〜やうゆちわをづ〜を、ゆどちなか〜む、
おぼ〜を〜〜るんのかどふハ 十九のひ〜 おぼ〜を〜〜ちハ、おぼ〜ふめと
源氏、写〜後ふる、かどハ、ゆちを後ふる物べ〜、遁世ちこそ、おぼ
をちわほのふを、

まぼろし地巻

ゑきさけて　三のひら　川避あり

ゑ　夜ごゑもとう　十五はちゑ　大雷がいつる　そくみを　涼とし　ゐひを例の

火ゑりうて　火はちゑ　ちかはさむる　ことゑて　ゐひのやとまると　涼むと

いつる　夜ゑりしちかへく　涼しきふゑ　ゆゑて　川を　ゐひの

やとまりびると　今日ばうわ　ゐひをやとゑへくとあると　こいつよ

ろし　ほゑふぢうわいふうゑ　ゐ

ゑ　さもてこいう　十六のひら　よるべのあはる　ほきふいつる　ゑ　神乃

託のふゑふて　べき　ちゑを入る　竈し　ゑはちゑる　ほきのおくく

ゑて　下るゑ　ゑ　ゑ　ゑはちゑ　ゑはちゑ　ゑはちゑ

ゑとこ　ゑわゑ　ゑ　ほきほどとはべく　ほのいく　ゑはちゑ　ゑ　おぐく

ちくしてゑ　ちぐう　ほくしびいまぐきてぐとし

ゑ　つとぐくこう　十七のひら　かぐく　ほきはぐく

ゑ　ゑはぐはちゑ　ゑ　ちくはゑ　業上の　ゑはちゑ　ゑ　ゑ　ゑ

ぐ　ぐ　ゑはちゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

いはで　ふゑ　ほはちゑ　ほはちゑ　ほはちゑ　ほはちゑ　ほはちゑ

きふいつるが　ちゑ　ほはちゑ　ほはちゑ　ほはちゑ　ほはちゑ

ゑはちゑ　ゑ　業上の　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

せて　ゑふが　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

ゑ　ちゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

京北にあるとなるべし。

まんやふつもわふる　十三のひ　かつ清あぐらせぞ　ゑるくとおもつ

もろびいふるべし。

雲隠巻

此巻ハ光の君の薨て、何ゐ、まこハ老ぬ。源氏君ハ、ものこ

ゝびもてゝ、そゝゐをバ、そぶきてかゝるゆゑ、紫式部乃、物ゝくん

をゝもゝゝ、そもゝ源氏君をバ、よゝるゝ、ものをゝ、ゝをあつ

めてゝきゝゐ、ゝゐ、ふゝの侍るかしてゝ、ゝ書ゝ、摂政の北女ゝ、親王

乃北女ゝ、姫宮ゝ、ゝ、ゝ后ゝ、ゝ后ゝ、ゝ后ゝ、ゝ后ゝ、ゝ后ゝ

ゝ、ゝ乃上天皇ゝ、ゝ号ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

ふゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

なき世に、中一條氏の物語り給ひしを、かゝせ給ひしものゝ
こゝのかさねこゝふくろかくべき。條氏の物語ぬ人のゝ乃ゝ和しこゝ
ろ。浦きゝ乃ゝ人ハ佐々ゝがとゝるべし。こゝ也。條氏のかゝ也給へる
こゝ世。こゝ也。ゆゑの一つ和り。　ゆゑきゝ和ゝと此世の海。乃ゝゝ
ゆゑこ。又ゝゝ和きゝ。ゝ和り。乃ゝハ古へ人乃。絶王世ゝゝ。ゝ乃例又を
ゝゝゝ世乃。逸話といふ物を。例かゝ引也ゝるなゝ。乃ゝゝゝ也ゝこ。
乃ゝハ佛のゝゝ世。天台の法門をおゝゝ。ゝ也ゝ引也ゝる和ゝ。あゝ
ふゝゝも和きゝゝゝ。ゝゝゝふゝゝ和きゝゝし。まゝ仁義禮
智信を也ふゝゝ。人の道ゝゝゝゝ。人ゝ佛ゝ世ゝゝゝゝ
乃ゝ和ゝ。乃ゝ。ゝゝゝ物語ゝいふゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

たくりいでぬかりふとう　十はち　たくりいでぬかりふとうでハ侍らず
のんぢ。又ぬぎりるゝ人まて。ゐぐ。きしゐ為なる。
ゐのかうぎ　きぞう　日　けすつてうかがそし。そ所を。大ゝ人の子
ふおのづゝ。ゝ。ゝ。

うくとやあるまゝ、はきとし、はいくゝるぐり、
人のはをさゑなどうハそもうゝ　十五の夕　などうくいふて、はも、
かゝ、ゆ、衍、などハ、ゆるべし、

竹川光

こゝハぎんじゆうゝ　二のうゝ　はちぐめ、はゝ、いづゝ、ハまてゝなるむ
といふまで、はどもあぐ〳〵、ゆ、ゆ、ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をでらんがつる　十二のひら　ろうがつるハ、ゞをでるこの基〜紀をつふ何りて、
きえうつるを紀うつるがどいふうつるふ日ゞ。再三をでるしといふハ語し。
きれものなるハさんう　日　なるハさん、すぐる〜。好るうんもいゞ。もしハ
なるさんを語まるあるうつるゞう。
んあをいるゞ　十二のえ　いるゞもいをゞるゞ。
いとなんわいをゞる　日　法ふあをあきるもついでふゞふ父大臣の法すハ、
ひひ出るふまして什業ゑの和琴ハ父大臣ゞ瓜ふよう〜ゞるをバ此絃
のをふ法〜感ゞて。ゞをふ法〜ゞ行をてゞあゞをし
日ゞ琴ふ出して　十三のひら　日ゞをふとハ業ゑゞの行川をうる
ひ出〜ゞ行ひるふつをて日ゞ〜うるふゞいふし業ゑの行川をう

るひ出るれるをハ〜ふをゑ〜ゞをゞと。下ゞるふ行川のをう
ち出〜とゞるをて去るゑ。をて知てハ。うるひ出てし。
ゑうをゞ　日　こよひを伊の出発をゞるゞふいるゞ〜ふ琴をふ
うるをうるゞ。をゞ〜ゞふをるのをゞ何し。
当をゞかるゞやを　日　什をゞかるハ。をゞをゞるとゞをのをゞるゞ人うる
琴るゞゞゞのかるをて。をゞふよりてをゞふしこよひ業ゑををゞる
もてをやをるをハ。をゞのをゞ日ふよりて。ゞををゞるふゞや行ら
んを。玉菊ゑのををふををゞりをいるし。下ゞハ必ゞを業ゑをの
をもてをやゞて。ゑををゞるをそるふゞがをるゞるゞ行ゞをし。
ゞ行川ふを　十四のえ　二の日。をハ。をの語るて。ゞををゞををし。日のゞ。をハ。

の湯し。おけもて来てハ。一その法そのそば。あけそこハよべき。飯を盛りさ
ゞらそ。いそゞてうつわ。ひしゝ。酒を。注きんの座をもうつそやそのそ
ふそいそることとろ。ひかき。給らん。いとんなるよしし。注いそ
きゝもゞひし。

花もの食をも。吉波しそ。　十七のひゝ　二つのをもゞ。ひもろる。酒うれと
いつふうれそゞ。色も吉るとてそ。べらし。

法ゝ。酒ゝ。ゝ。穂ゞ　ゞ。もゞ。衍るべし。

かゞふそひてゞ　十九のそ　酒の法ふそひて。ゞびつし。

そさゝゝ。ゆそ。　ゞ　ひゞ。ゞ。ひやそ。ものきそ。ゝ。そ。そ。ゝ。

け。橋の。嫁。ものかよりて。婿。の。ゝ。ふ。ひやそ。ものきゝし。

そ　ひわりてそ。　ゞ　みぎはふゝいふふ。右方ふりわそ。ゝ。ゝ。

給ゝゞ。給ゞ。んそて。ゝいふて。ゝ。ゝ。

そちゝ。ゝ。そ。　十の　結句。一な。神そ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

も。大。ふ。ふ。ふ。ゞ。ゝ。神。ゞ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

そ。ゝ。ものを。いふし。

給ゞ。そ。そ。ゝ。ゝ。　ゞ　ふれの。ひを。なゞ。ゝ。給へそ。玉。者。ものそ。ゝ。

ふ。けわゞを。ゞ。ゝ。ゝ。給。ゞ。給。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

注いゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

そ　いでやそ。ゝ。　十三のひ　給句。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

いでや。行。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

の源の何し。とゝと考へ合せて考へるべし。

[illegible]ふぞ考へる　十四のひら　仏方は中ぬのかゝり。なるべし。玉書玉はゝ[illegible]

してはとゝふとおのゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

玉書玉の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

考へるべきと思ひ[illegible]ゝ[illegible]ふ　十五のもゝ　べきはべし。なるべし。後の考へ人はかゝ

やうの何のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

下白[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゆ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ら[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゑふかゐうゝ　日　松山のなみハなし。ゆの白ゆこゆるハ。くだけてゆゑふゑ
ゑふいつるのなりけり。
ゑもゝゝさき結ふゝ　日　結句。若の花の孫なれ。かゝらざりけるとなり
ゑ。きゝわけ。をハまらせざりけるとなり
かんの君を中結ふ　十九のゝ　かんの君をいとものしとおもひて。そのゝ
を中結ふし。かんの君ゆとハ異し。
新人おゐの月乃光ゝ　廿三のゝ　かゞやきハ月の光をまばゆくおも
ふゝて。きぢかゞやくといふゝ。容貌の光ゝ。ゝて思かゞやく
といふゝハ。ゝ。蹈歌ゆ夜。此院中ゆ。新人おゐの。月ゆ光をま
ぶゆ。ゝ。ゝ。ゝ。月ゆ極のゝ。ゝ。ゝ。

ゆひ[illegible]きて、ふを[illegible]とし、院へ[illegible]
[illegible]ひ[illegible]ふらりて、大方[illegible]ハ[illegible]
なることとりう[illegible]
[illegible]のたえ[illegible]ものきやう[illegible]ど　[illegible]
[illegible]のやう[illegible]
[illegible]
[illegible]

う宴ハ彼所のまつりごとかなて、絵るべくもざるるすし、ちやく譲りて、
申ものう、まづくちをえ絵へくし、侍のさまにて、味ひそ、るべし、
みとうちの大夫（ダイフニン）は浮むをきびしく　（早はやく）　みとうちの内女を、恋ものうし
んぐ、絵ひくるハ、詩吟、武勇つ、ものの姿ものの様ハ、ものうちの
恋ものの初ふきのふ、ふしいふをうり、恋ものやおどおぼし、ものも言
しぬぎを絵ひきうとして、大夫の内女をうハ、白ものを、ものの天
皇乃ハ女一ところを、恋ものふ、んぐ、めひ、こと、ものう、
大夫殿も　（皆のひ）　お梅ものを大臣をこ、ふかくうちまうせて大臣殿と申
ものをこそ、ゆうり好きやうふものもとど、新位の大夫にて、次うり引で
きて、大答はうをいつもをかくもつるべき文うや、